

k-633

山形県長井市埋蔵文化財調査報告書 第23集

愛宕山館遺跡発掘調査報告書

2003年

長井市教育委員会

愛宕山館遺跡発掘調査報告書

平成 15 年

長井市教育委員会

序

この報告書は山砂採取に伴う愛宕山館遺跡の緊急発掘調査報告書であります。

長井市では平成4年の遺跡地図作成を契機に、公共事業を中心に開発と遺跡保護の調整に努めてまいりましたが、ここ数年来、民間開発における遺跡保護の調整件数が増えつつあります。

このたび、那須建設株式会社が計画した山砂採取の係わりから、平成13年に遺跡の緊急発掘調査が行われることになりました。伊佐沢地区は古くから愛宕山館遺跡をはじめ戦国時代の山城や平地の館跡が多く残っている地域で、今日でも館や館の内という小字名が残っており、国指定の天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」の樹齢に関する言い伝えのひとつにも戦国時代の武将の名前が登場します。また、愛宕山館遺跡の調査現場に立って周囲を見わたすと南は米沢から西は川西・飯豊町を一望することができ、遺跡のすぐ下を流れる最上川が天然の濠の役目を果たしたと考えられ、山城としての条件を備えた場所であることを痛感させられます。さらに、山の斜面に見る削平と盛土による整地技術には当時の土木工事の痕跡をうかがい知ることができ、県内では調査事例が少ないといわれる山城の発掘調査において貴重な成果を得ることができたと確信しております。

最後になりましたが、猛暑のなか発掘調査に参加くださった方々、また、一連の遺跡保護にご理解とご協力を賜りました那須建設株式会社の皆様に対し、心より感謝申し上げます。

平成15年3月

長井市教育委員会

教育長 竹田辰雄

例　　言

1. 本報告書は、山砂採取事業に係る愛宕山館遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2. 調査は那須建設株式会社の委託により、長井市が実施した。

3. 発掘調査期間は平成13年5月21日から7月25日までである。

4. 調査体制は次のとおりである。

調査主体 長井市教育委員会

調査担当者 岩崎義信（長井市教育委員会）

調査参加者 斎沢敏雄、板垣茂雄、大沼 正、小浦信子、片倉吉直、川井のり子、
渋谷達英、鈴木孝吉、高世博美、高橋和男

資料整理 布川紀子

事務局

事務局長 中川輝男（長井市教育委員会文化生涯学習課長）

事務局長補佐 村上和雄（長井市教育委員会文化生涯学習課補佐）

事務局員 岩崎義信（長井市教育委員会文化生涯学習課主査）

事務局員 吉川幸代（長井市教育委員会文化生涯学習課主事）

5. 発掘調査ならびに報告書作成にあたり次の方々からご指導・ご協力をいただいた。

（敬称略、順不同）

那須建設株式会社、山形県教育庁社会教育課文化財保護室、山形県埋蔵文化財センター

6. 本報告書に記載した遺構・遺物の縮尺はそれぞれスケールで示した。

7. 本報告書の編集・執筆は岩崎義信が担当し、挿図・図版の作成にあたり布川紀子の補助を得た。

目 次

序	
例 言	
第Ⅰ章　調査の経緯	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の方法と経過	1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
第Ⅲ章　遺跡の概観	6
1. 基本層序	6
2. 造構と遺物の分布	6
第Ⅳ章　発見された遺構と遺物	8
1. 掘立柱建物跡	8
2. 曲輪	8
3. 計壕状遺構	19
4. 包含層出土遺物	25
第Ⅴ章　まとめ	27
1. 調査のまとめ	27
報告書抄録	卷末

挿 図 目 次

第1図 調査区概要図	2
第2図 遺跡位置図	5
第3図 基本土層図	6
第4図 遺構配置図	7
第5図 1号掘立柱建物跡、1号曲輪	9
第6図 東曲輪群	10
第7図 東曲輪群断面図	11
第8図 2号掘立柱建物跡、15号曲輪	13
第9図 西曲輪群	15・16
第10図 西曲輪群土層断面図	17
第11図 西曲輪群断面図	18
第12図 計壕状遺構（1）	21
第13図 計壕状遺構（2）	22
第14図 計壕状遺構（3）	23
第15図 計壕状遺構（4）	24
第16図 包含層出土遺物	26
第17図 愛宕山館遺跡略測図	29
第18図 伊佐沢の山城略測図（1）	30
第19図 伊佐沢の山城略測図（2）	31
第20図 伊佐沢の山城略測図（3）	32

表 目 次

第1表 東曲輪群一覧表	12
第2表 西曲輪群一覧表	14
第3表 計壕状遺構一覧表（1）	19
第3表 計壕状遺構一覧表（2）	20

図 版 目 次

図版1 遺跡遠景（西から）	
調査区全景（上空から）	
図版2 遺跡近景（南東から）	
西曲輪群（西上空から）	
図版3 東曲輪群（上空から）	
15号曲輪（東から）	
図版4 1号掘立柱建物跡（北東から）	
15号曲輪（南東から）	
図版5 16・26号曲輪（北から）	
15・17号曲輪（南東から）	
図版6 11号曲輪（北から）	
14号曲輪（東から）	
16号曲輪（西から）	
図版7 19号曲輪（西から）	
19・20号曲輪土層断面（北西から）	
19号曲輪土層断面（西から）	
図版8 26・29号曲輪（北から）	
26号曲輪土層断面（北から）	
29号曲輪土層断面（北から）	
図版9 1～7号計壕状遺構	
図版10 8・9・11・12・14～17号計壕状遺構	
図版11 18～23号計壕状遺構、炭窯跡	
図版12 包含層出土遺物（1）	
図版13 包含層出土遺物（2）	

第Ⅰ章 調査の経緯

1. 調査に至る経過

愛宕山館は昭和63年の分布調査で発見された遺跡で、豊田地区と伊佐沢地区にまたがる愛宕山山頂を中心とし、広がりを見せる城館跡として周知されている。また、平成6年に行われた山形県中世城館遺跡の調査では310m×700mの範囲にわたり館跡に伴う遺構が発見され、長井市内の城館跡では最も規模の大きい遺跡である。

平成3年に那須建設株式会社より本遺跡の西側にかけて土砂採取事業が計画され、開発と遺跡保護の問い合わせを受けたため、平成4年に現地踏査と試掘調査を実施したところ、愛宕山山頂から北西に張り出した尾根沿いに平場や帯曲輪と呼ばれる段々畑状の平坦地が2～3段築かれているのが随所で発見された。また、深さ1mの溝跡が約120mにわたり築かれているため、1×10mのトレンチ3箇所を溝跡に直行するように設定し掘り下げを行ったところ、粘質土に砂を混ぜた土が層をなして検出されたことから、溝跡は人為的に突き固められた版築技法による土手跡と推測され、愛宕山館の西側に空堀を巡らせた大規模な館跡として遺跡台帳に登録されていた。

このため、遺跡の取扱いについて開発側の那須建設株式会社と協議を重ねたところ、愛宕山から北西に張出した尾根の部分を削平区域とし、開発面積を縮小し空堀が巡る平坦地は保護することで同意に達した。これを受けて市教育委員会が主体となり、遺跡範囲に含まれる西に張り出した尾根上の平坦地約1800m²を対象に、緊急発掘調査を実施したものである。

2. 調査の方法と経過

現地調査は平成13年5月21日から7月25日まで実施し、実働調査日数は40日間である。また、調査を実施するにあたり立木の伐採と地形測量およびグリッド設定は開発者の那須建設株式会社からご協力をいただいた。

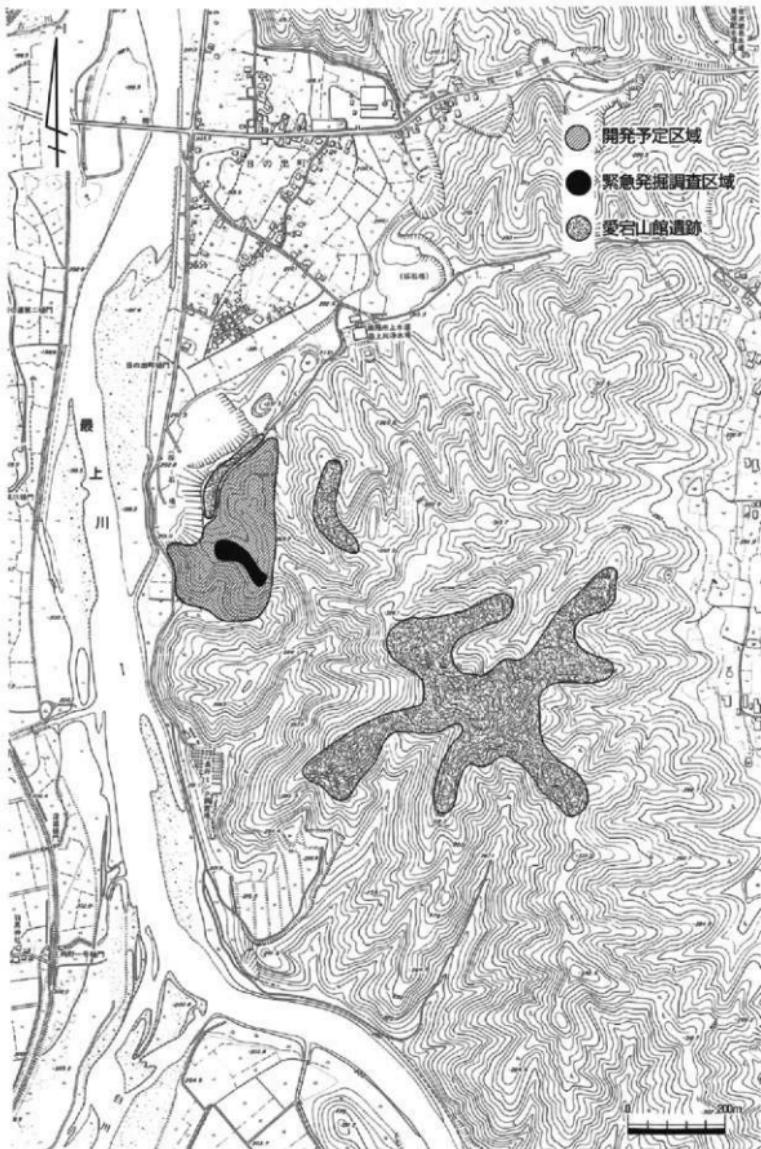
5月21日 器材搬入、現場事務所を設営し、調査を開始した。

発掘調査は表土層の除去を行い、遺構検出のための面的精査、遺構の掘り下げおよび断面図、平面図の作成、レベル測量を実施した。表土層の除去は調査現場に重機等の搬入が困難なことからすべて手掘りで行った。遺構の面的精査および遺構掘り下げは人力で行い、遺物の出土状況や図面作成ならびに写真撮影などの記録作業は隨時行い、検出された遺構はすべて平面実測とレベル測量で記録保存にあたった。また、検出した遺構や遺物の出土地点は正確な位置関係が必要とされるため調査区全域に4m間隔で杭を打ち込み、4×4mを1単位とするグリッド(方眼区画)を設定し、北西→南東方向をX軸とし北西側から数字であらわし、北東→南西方向をY軸とし南西側からアルファベットで標記し区画番号とした。なお、押団の矢印は磁北を指す。

7月13日 遺跡範囲と調査面積が広範囲におよぶことからラジコンヘリによる空中撮影を行い、現地形の記録保存にあたった。

7月14日 埋蔵文化財の普及・啓蒙の目的から現地説明会を開催し、地元住民や関係機関および報道関係を対象に発掘調査の結果を公表した。

7月31日 器材撤収を行い、現地調査を終了した。



第1図 調査区概要図

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

愛宕山館は長井市の南東部、伊佐沢地区と豊田地区にかけて広がりをもち、山形県を南北に走る出羽丘陵の南端部に位置する遺跡である。一帯は通称東山とよばれ館の中核施設は愛宕山山頂部にあり、主廟にあたる愛宕山山頂は標高361.0mの三角点が設置され、愛宕神社が祭られている。山頂からヒトデのように張出した尾根にはいたるところに堀切や平場が構築されており、本調査区は北西尾根にあたる区域に位置し標高256mを測る。本遺跡の南西において最上川と白川が合流し川幅の広さを増しながら調査区の西側を北上し、「く」字状を呈する川の流れは愛宕山に沿って築かれた天然の水路を思わせる。また、遺跡からの眺望はきわめて良好で西は長井市街地から飯豊町にかけて、南は川西町から米沢市まで遠望することができる。近郷の人の動きはもとより眼下を流れる最上川も含めて、人や舟の動きを把握するには最も適した場所と考えられる。

白鷹町と接する大石地区には花崗岩の巨石が点在する。洞雲寺境内の裏には周囲が16mといわれる花崗岩の巨石が牛の背中のように横たわっている。他にもじじ石、ばば石、ばくち石と呼ばれる花崗岩の巨石が点在し、大石の地名の謂れになったという。

2. 歴史的環境

愛宕山館は地図において東側が伊佐沢地区、西側が豊田地区に属しているが、愛宕神社の由来や設置から伊佐沢地区との結びつきが強いようである。伊佐沢地区は東・西・北の三方向を小高い山に囲まれた盆地状の地形を呈し北から大石、上伊佐沢、中伊佐沢、下伊佐沢の4地区からなり、戦国時代の館跡に係わる遺跡が数多く残っている。なかでも大石地区の「大石の館」館主：金田某（第2図④）、上伊佐沢地区的「館の館」館主：桑島将監（第2図⑧）、上伊佐沢地区的「雨ヶ沢の館」館主：太宰新九郎（消滅）、中伊佐沢地区的「棚町の館」館主：山田主殿（第2図⑪）、下伊佐沢地区的「館ノ内の館」館主：不明（第2図⑩）は、「伊佐沢の五館」として古くから伝わっている。現在でも平地において人家や畠地の地目境に沿って土塁や堀跡が残っており方形館の名残をとどめ、特に下伊佐沢の小関氏宅では自宅の周囲に幅5～6mの堀が巡り、今日でも水を満え当時の光景を髣髴させる。「小関家屋敷」として長井市の史跡にも指定されている館跡である。周囲の山々では山頂部や尾根筋にかけて段々畑状の平坦地や、尾根を断ち切るような掘切がいたるところに残っている。若尻谷や御林館には高低差が4mに達する堀切も見られる。

白鷹町と接する大石地区にも多くの館跡が存在する。洞雲寺を中心に中屋敷館、廻館、大石館、岩館、馬隠曲輪と半径1kmのなかに5箇所の館跡が密集している。現在、大石地区的戸数は4戸にまで減ってしまったが、当時は山間地で寺を擁するほどの戸数を有していたほどである。米沢や南陽方面から山越えで白鷹に抜けるルートに大石の集落があり、交通機関の未発達な時代においては峠道の要所となっていたのかもしれない。

また、下伊佐沢の平子氏宅には、戦国時代に上杉房能の家臣であった平子氏が、越後、会津、米沢と上杉氏と共に移住し当地に移り住んだ係わりから、戦国期以来のさまざまな文書が「平子文書」として伝わっており、現在長井市の指定文化財となっている。

伊佐沢小学校の南西部に隣接するかたちで国の指定天然記念物「伊佐沢の久保ザクラ」がある。この桜は幹周りが9mを測るエドヒガンの巨木で、宝永5年に描かれた「久保桜見取図」が今日に伝わっているほか、樹齢にまつわる言い伝えが残っている。ひとつは樹齢450年説で、戦国期に当地方を治めていた伊達の家臣桑島将監が亡くした妻と子のために中伊佐沢の玉林時を建立し、供養のため植えさせたのが久保ザクラであるという。また供養碑といわれる石碑が玉林時に伝わっている。もうひとつは樹齢1200年説で、奈良時代に朝廷の命を受けた坂上田村麻呂が奥州平定のおり、当地方に立ち寄った際に地元の娘と恋仲になったが、田村麻呂が帰京してからまもなく娘は亡くなってしまったため、供養のため桜を送り植えさせたのが久保ザクラであるという。桜の樹齢にまつわる伝説に戦国時代の武将の名前が登場するのも当地域ならではのことである。

このように、伊佐沢地区には館跡と強い結びつきをもつ地名や言い伝えが残っており、戦国期の歴史を調べるうえにおいても貴重な手がかりになるのは言うまでもないことである。

参考文献

- 伊佐沢の郷土史編集委員会 1956 「伊佐沢の郷土史」
竹田市太郎 他 1984 「長井市史」第1巻 原始・古代編
長井市文化財調査会編 1989 「長井の文化財」
山形県教育委員会 1995 「山形県中世城館遺跡調査報告書」第1集（置賜地域）



- ①愛宕山館 ②中屋敷館 ③廻館 ④大石館 ⑤岩館 ⑥馬込曲輪 ⑦若尻砦 ⑧桑島館 ⑨御林館 ⑩裏山館
 ⑪相町館 ⑫小岡館 ⑬下伊佐沢館 ⑭源徳原館 ⑮茶白館 ⑯遠藤館 ⑰白山館 ⑱小桜城 ⑲八幡館
 ⑳古お屋敷館 ㉑亀ヶ森砦

* この図は城館跡を抜粋して作成した遺跡地図である。

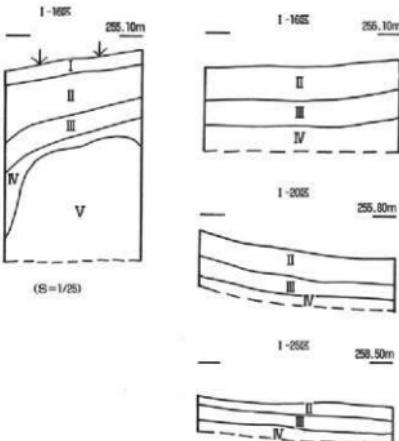
第2図 遺跡位置図

第Ⅲ章 遺跡の概観

1. 基本層序

帶状に伸びる調査区の北西部において基本層序に変化が見られた。遺構が密集しているD～L-5～10区にかけて曲輪の構築による削平や盛土が行われているため一部II層やIII層が欠落する箇所も見られる。しかし、山地の後線にあたる11～29列にかけて遺構の構築はあるものの、土層堆積に著しい変化は見られず安定した層位を保っていた。ここでは山の後線に沿って設定した試掘坑の土層堆積を図示し、遺構の密集するD～L-5～10区の層序は西曲輪群の項で述べることとする。

- I層 黒褐色土 腐植土表土層
II層 暗灰褐色土 しまりの弱い土質。
III層 褐色土 粘質土で1mm大の砂粒を多く含みかたくしまった土質
IV層 橙褐色土 赤みを帯びた粘質土。
V層 暗褐色土 風化した花崗岩の砂層

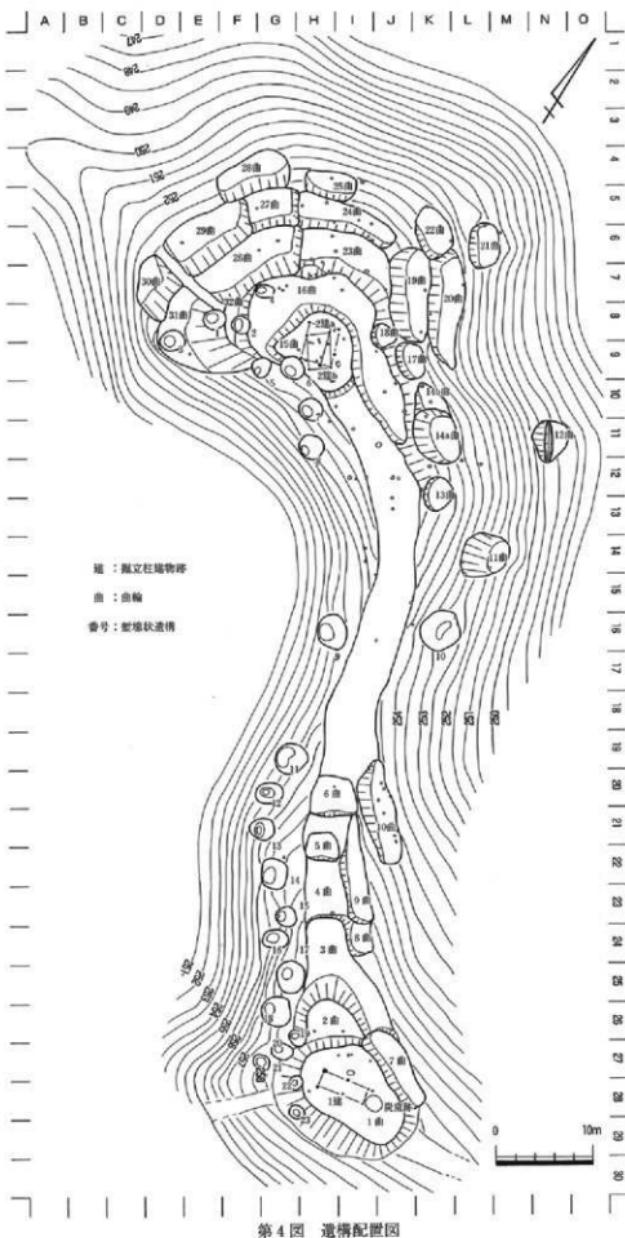


第3図 基本土層図

2. 遺構と遺物の分布

このたびの調査で検出された遺構は掘立柱建物跡2棟、曲輪32基、塹壕状遺構23基である。掘立柱建物跡は調査区東端部の1号曲輪で1×2間の建物跡が1棟、西側の15号曲輪において1×1間の建物跡が重複して検出されたが明確な掘り方は未検出である。曲輪は調査区の西側と東側で数多く検出されたため、それぞれ西曲輪群と東曲輪群と称した。尾根の端部を平坦に削平し、それを巡るように曲輪が弧状に配置されているが、途中に段差が見られることから複数の曲輪を連結させて帶曲輪の形状に構築しているところに特徴がある。塹壕状遺構としたのはほとんどが南側斜面で検出されたもので、遺構の特徴として平面が円形を呈し斜面を窪地状に掘り込んでいる。また、平坦な底面を有し径約15cmのピットをもつものもある。戦時中に松根油を得るために自生する松の根を掘った痕跡とも考えられるが、急斜面である南側の尾根筋に沿って築かれていること、覆土の堆積状況が他の遺構と似ていること、白山森館にも同様の窪地が存在することなどからこれらを遺構と判断し、ここでは塹壕状遺構と仮称した。これらの遺構から遺物が出土しなかったため年代の特定には至っていないが、遺跡の立地や遺構の形状から戦国期の所産と考えられる。

遺物は包含層からの出土で散発的なものであった。縄文土器が數片と碎片が十数片、それに磨石が10点出土した。15号曲輪の北斜面から碎片がまとまって出土しており、縄文時代の集落跡の存在が予想される。



第IV章 発見された遺構と遺物

1. 挖立柱建物跡

1号掘立柱建物跡（第5図、図版4）

位 置 H・I-27・28区に位置する。

遺存状況 良好である。

重複関係 なし

規 模 梁行1間×桁行2間の長方形を呈する掘立柱建物跡である。

主軸方向 N-80°-Eを指す。

柱間寸法 梁行は西・東側で1.6m、中央部で1.5m、桁行は短辺で2.3m、長辺で2.6mを測る。

掘り方 北西隅で1基検出した。平面形は円形を呈し、径44~50cm、深さ15cmを測る。

出土遺物 なし

時 期 遺物が出土していないため時期を特定することは困難であるが、遺跡全体の出土遺物から大枠として戦国期の範疇でとらえられよう。

2号掘立柱建物跡（第8図）

位 置 G-I-8・10区に位置する。

遺存状況 良好である。

重複関係 なし

規 模 柱配置から2棟の掘立柱建物跡の存在が推測されるが、新旧関係は不明である。ここで便宜上、掘立柱建物跡a、掘立柱建物跡bに分けて記述を行う。

掘立柱建物跡a 身舎は梁行1間×桁行1間の長方形を呈し南北に長軸を有し、東側に庇をもつ。

掘立柱建物跡b 梁行1間×桁行1間の長方形を呈し北西-南東方向に長軸をもつ。

主軸方向 掘立柱建物跡a N-18°-Wを指す。

掘立柱建物跡b N-35°-Wを指す。

柱間寸法 掘立柱建物跡a 梁行は2.2m、2.3m、桁行は3.8m、4mを測る。

掘立柱建物跡b 梁行は2.2m、2.4m、桁行は3.5m、3.6mを測る。

掘り方 なし

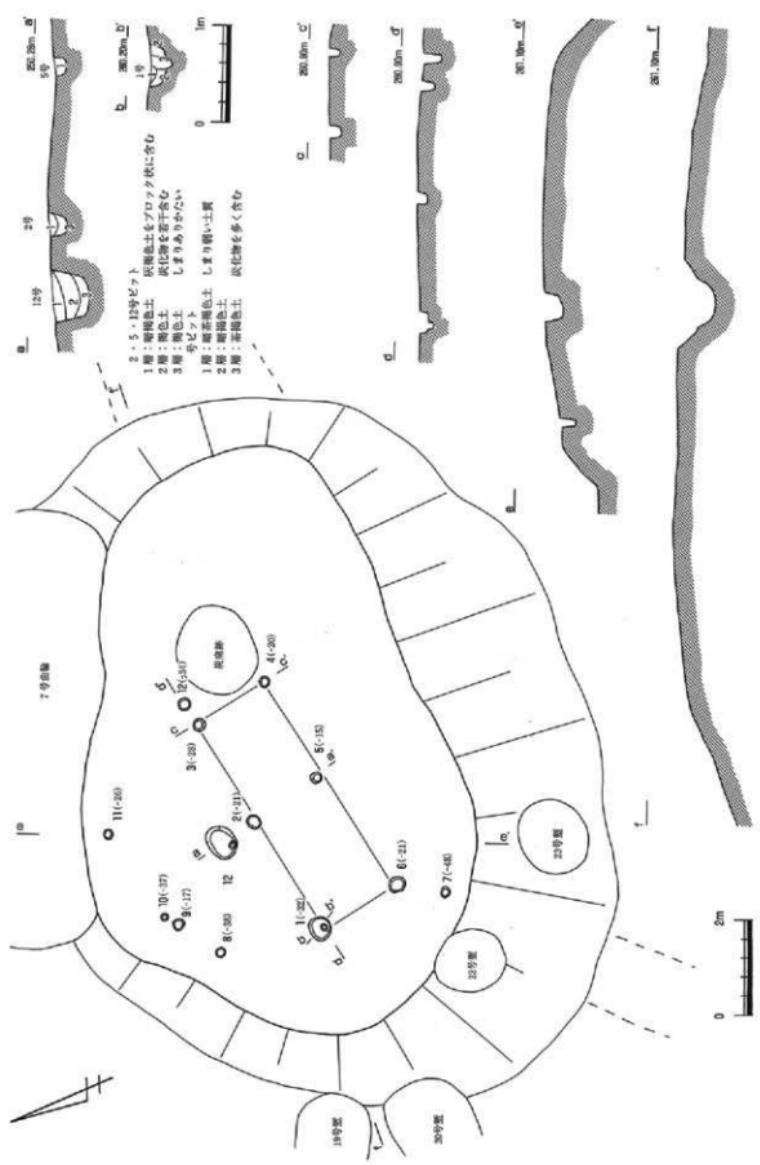
出土遺物 なし

時 期 遺物が出土していないため時期を特定することは困難であるが、遺跡全体の出土遺物から大枠として戦国期の範疇でとらえられよう。

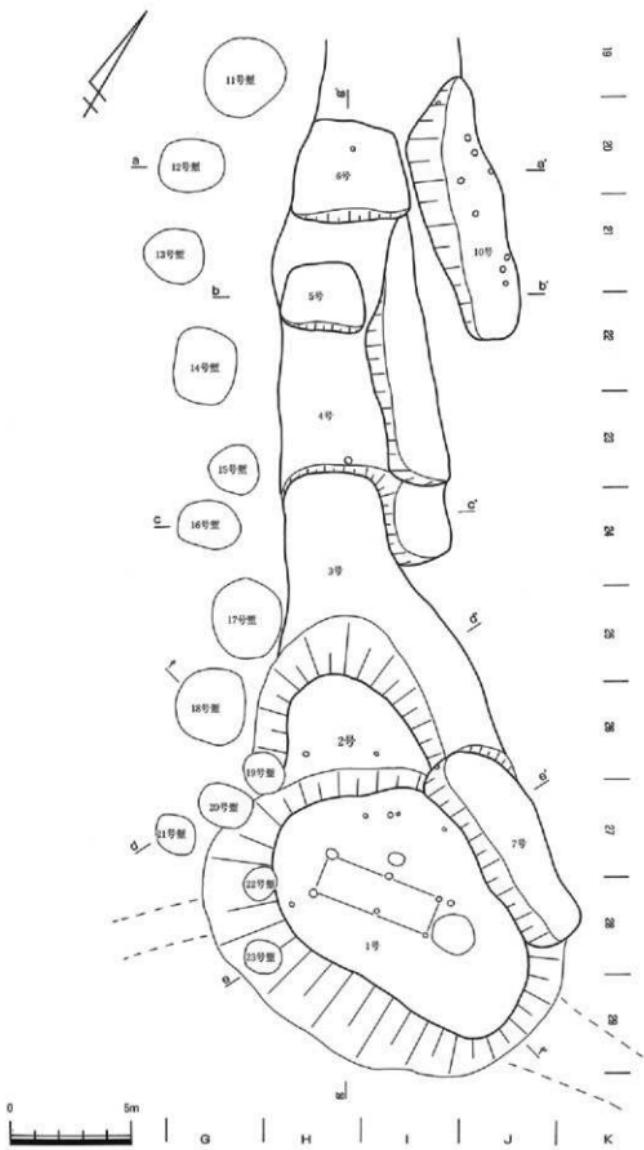
2. 曲 輪

(1) 東曲輪群（第6・7図、図版3）

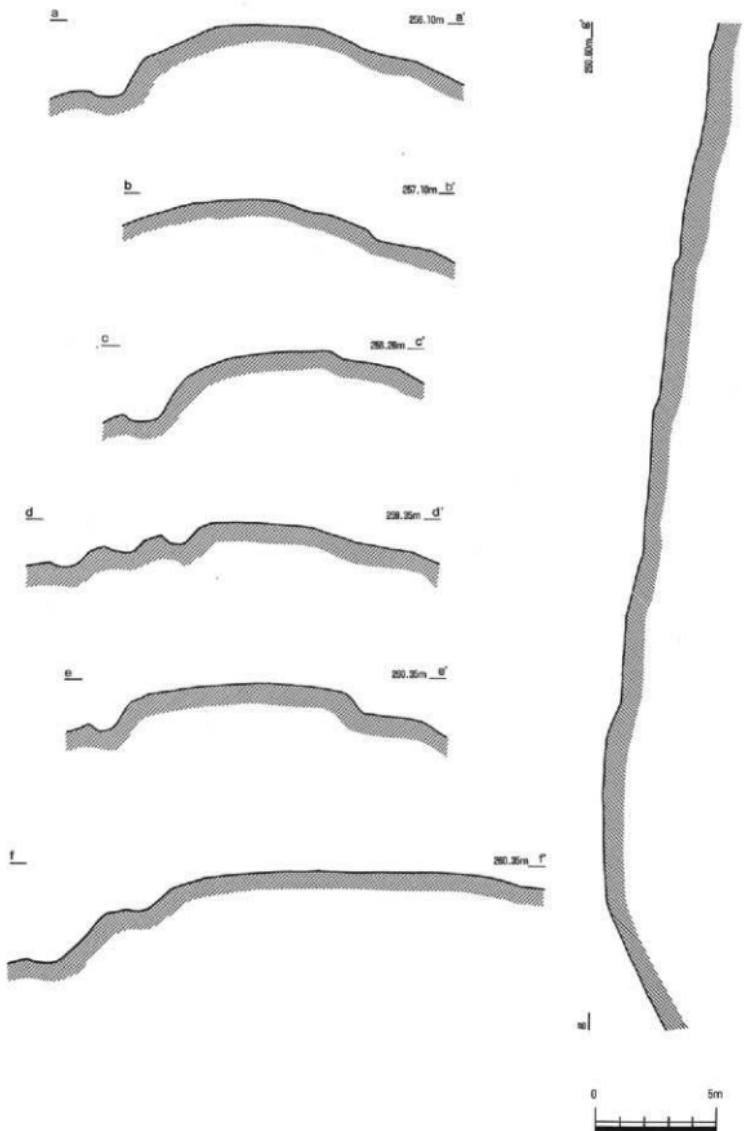
北東から南西に伸びる丘陵の稜線に沿って10基の曲輪が検出された。丘陵の東端部を削平し平坦地が築かれ、東と西南方向に道形が見られる。南西の道方は遺跡西側の沢に通じるが、東の道形を尾根沿いに進むと館の中核となる愛宕山頂にたどり着くことができる。1号曲輪は遺跡の東端にあたり掘立柱建物跡が検出されており何らかの機能をもった施設の存在が予想される。1~6号曲輪は段々畠状を呈し尾根筋にほぼ一直



第5図 1号掘立柱建跡、1号曲輪



第6図 東曲輪群



第7図 東曲輪群断面図

第1表 東曲輪群一覧表

(単位: m)

No	押団番号 図版番号	位 置	形 態	規 模 長軸×短軸	標 高 (平坦面の値)	備 考
1	第5・6図 図版3	H～J-27～29	不整円形	12.2×8.0	259.57～260.10	山道に通じる
2	第6図	H・I-25・26	半円形	5.8×3.9	258.93～259.31	
3	第6図	G～J-23～26	「く」字形	12.2×6.0	257.96～258.37	
4	第6図	G～I-22・23	台形	5.4×4.2	256.98～257.84	
5	第6図	H・I-21・22	台形	3.5×2.7	256.60～256.83	
6	第6図	G～I-20・21	台形	4.9×4.3	255.66～256.10	
7	第6図	I・K-26・28	長椭円形	9.0×3.1	258.50～258.96	
8	第6図	I・J-23・24	長方形	3.3×2.5	257.50～257.54	
9	第6図	H・I-21・23	台形	11.1×2.5	256.17～257.28	
10	第6図	I・J-19・21	台形	10.8×3.8	254.72～255.32	

線に連なり、断面からも人為的に作り出された平坦地と見ることができる。隣接する曲輪間の比高差が少ないことから、これらの曲輪は掘削土量を最小限にとどめるため緩やかな斜面を利用して築かれたものであろう。

東側斜面には稜線に沿って帯状の曲輪が構築されている。7・10号曲輪は隣接する曲輪との比高差が大きく40～90cmの高低差を測る。また、曲輪の底面において山側でかたくしまった粘質土が露呈しているのに対し、谷側では比較的やわらかな土質の底面となる。帯状の曲輪の構築方法として山側で深く掘削された土が谷側に運ばれて突き固められ平坦地が築かれたものと推測され、半切り半盛りの工法と言うことができよう。

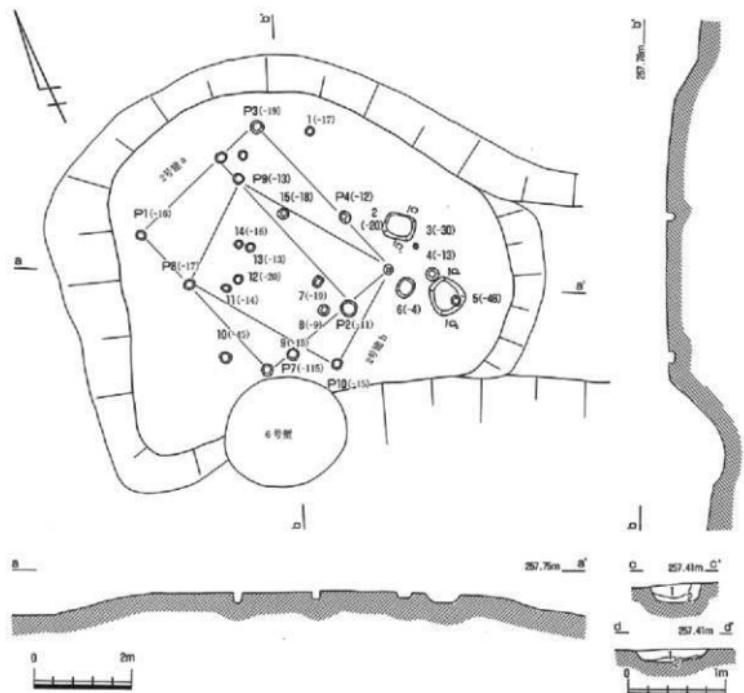
また、曲輪の重複関係を見ると、7号曲輪は1号曲輪の北斜面を削って構築され、8号曲輪は3号曲輪を、9号曲輪は8号曲輪をそれぞれ切って築かれており、高所から低所へと曲輪が構築されたものと推測することができる。

本曲輪群で多くのピットが検出されている。規模は径20～30cm、深さ15～40cmを測るが、1号曲輪で検出された掘立柱建物跡の柱穴とは明確に異なり、ピットの位置がまちまちで配置に規則性が見られないこと、覆土がきわめて軟質であり空洞化して覆土の堆積が見られない個所もあることから腐食した木根の可能性もある。

(2) 西曲輪群 (第8～11図、図版2)

調査区の西から北斜面にかけてまとまった数の曲輪が検出された。丘陵突端の頂に位置する15号曲輪を中心に帯状に連結した曲輪が同心円状に配置されているところに特徴がある。特に西斜面において4条の曲輪が帯状に配され、ふもとを流れる最上川や平野部を意識した曲輪配置をとる。反対に30・31号曲輪は急峻な斜面に築かれたためか規模が小さい。しかし、上下に隣接する曲輪の比高差は120～130cmを測る。

15号曲輪は平坦面をもち掘立柱建物跡が検出されたほか16基のピットが見つかっている。本曲輪群からの



第8図 2号掘立柱建物跡、15号曲輪

眺望はきわめて良好であり、遺跡の立地にかなった造構配置と考えられる。15号曲輪を軸に4~5条の曲輪が同心円状に配置されている。しかし、単体で残っているのは16号曲輪のみで他は複数の曲輪が連結した状態で連なっており、曲輪間には30~40cmの段差が認められる。また、曲輪の重複関係を見ると標高の高い位置に築かれた曲輪は低い位置に築かれた曲輪によって切られて構築されており、高所から低所へと曲輪の構築状況を推測することができる。

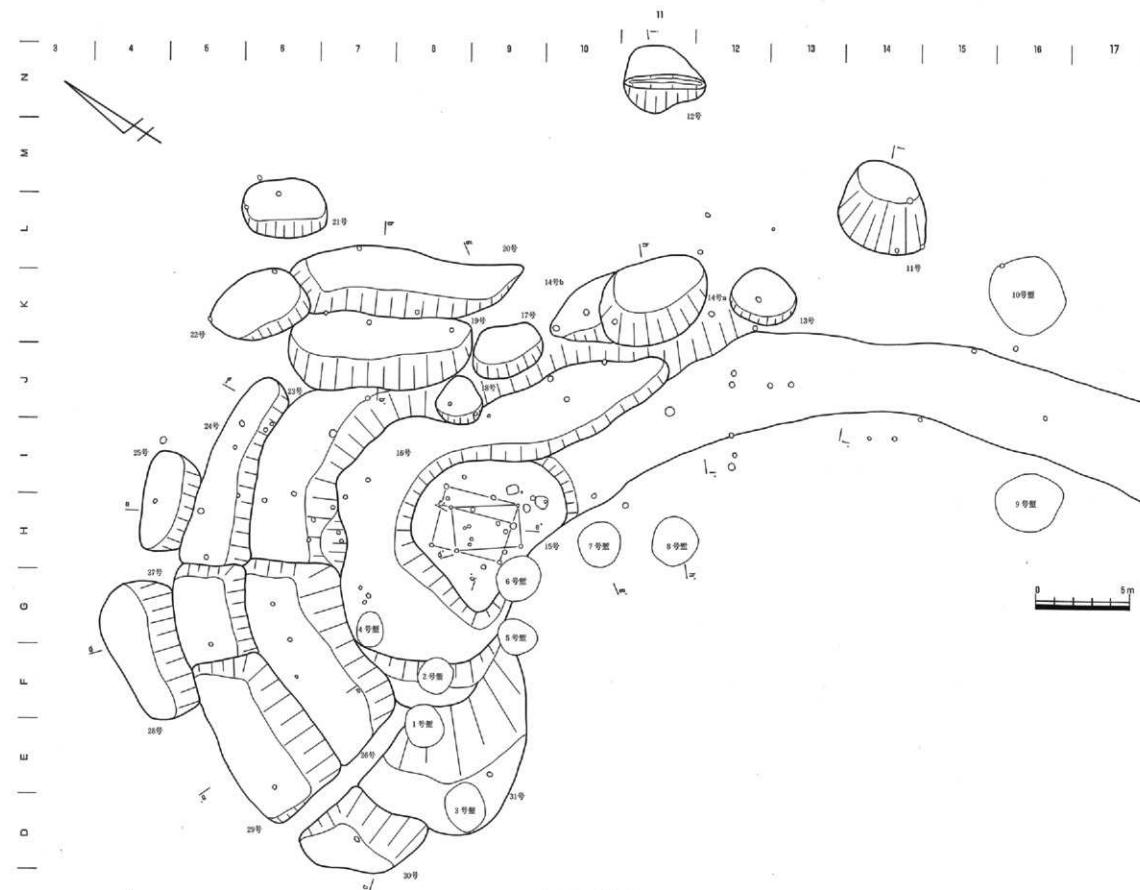
北東斜面にある曲輪は円形や橢円形を呈し、斜面の起伏に沿ってしかも単体で構築されたものが多い。また、上下に隣接する16・17・20号曲輪における比高差が2mに達する箇所もある。北東斜面を下ると傾斜が緩やかになり沢に達する。さらに沢沿いに進むと分布調査で確認された長さ120mの空堀にたどり着く。地形と防御施設からくる配置造構の相違であろうか。

本曲輪群でも多くのピットが検出されている。規模は径20~30cm、深さ15~40cmを測るが、ピットの配列に規則性が見られないこと、覆土がきわめて軟質であり空洞化して覆土の堆積が見られない箇所もあることから腐食した木根の可能性もある。

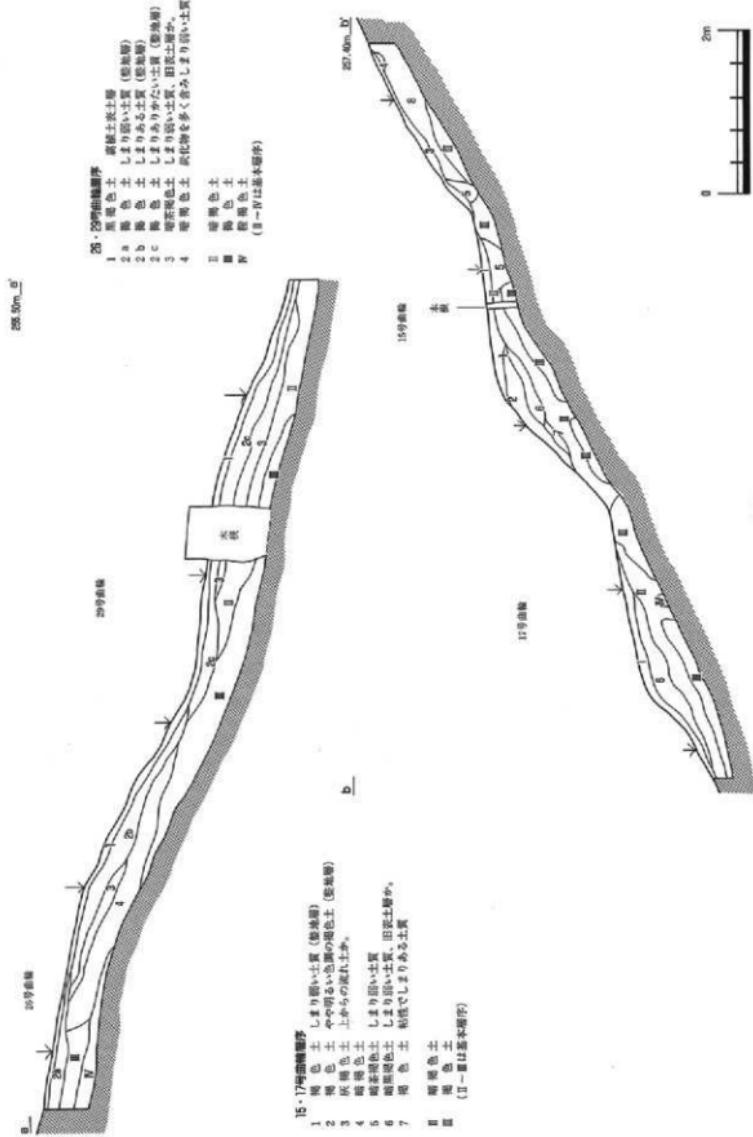
第2表 西曲輪群一覧表

(単位: m)

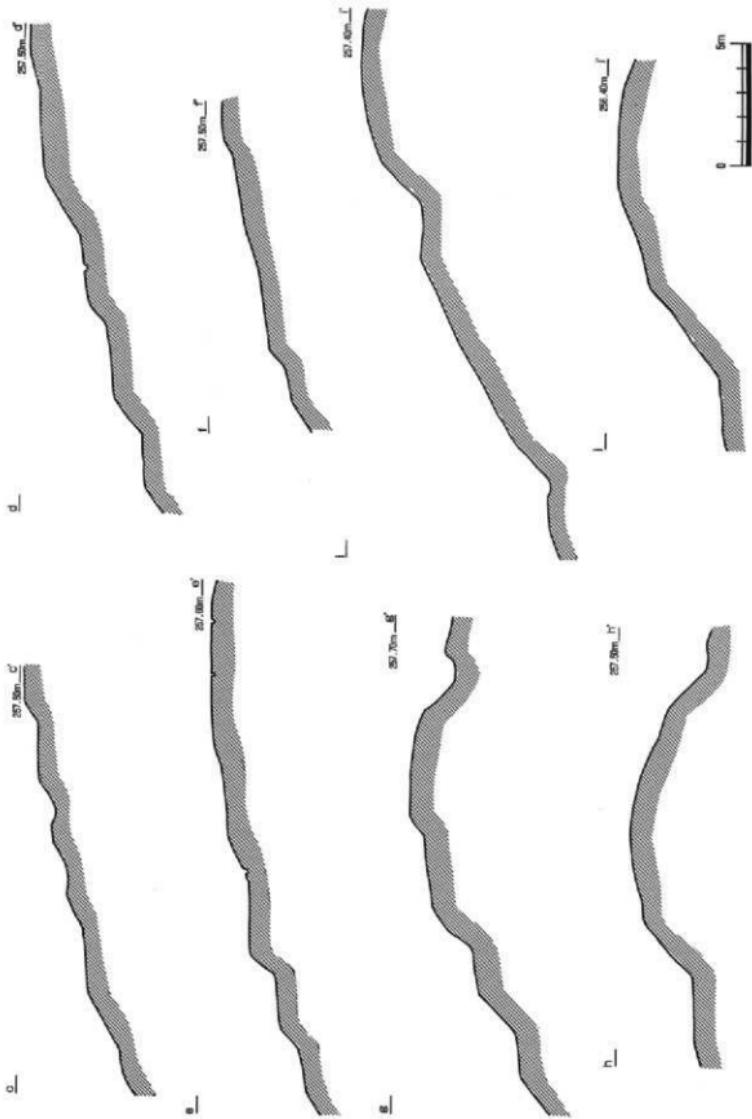
No	押図番号 図版番号	位 置	形 態	規 模 長軸×短軸	標 高 (平坦面の値)	備 考
11	第9図 図版6	L～M～13～15	台形	4.7×4.6	251.65～251.79	
12	第9図	M・N～11～12	台形	4.4×3.6	248.97～249.23	
13	第9図	K～L～12～13	円形	3.5×3.0	255.21～256.63	
14a	第9図 図版4	K～L～10～12	椭円形	5.6×4.4	254.24～254.45	
14b	第9図	K～11	不明		250.60～250.99	
15	第8・9図 図版3・4	G～I～8～10	台形	8.0×6.9	257.16～257.26	6号壇場状造構と重複する
16	第9図 図版5・6	F～J～7～11	「し」字形	30.2×4.8	256.14～256.78	5号壇場状造構と重複する
17	第9図 図版5	J・K～9	台形	3.9×2.7	254.12～254.42	
18	第9図	I・J～8～9	台形	2.5×2.5	255.44～255.75	
19	第9図 図版7	J・K～6～9	不整精円形	9.7×3.8	253.57～254.22	
20	第9図 図版5・6	K・L～6～9	不整台形	12.4×3.2	252.08～252.67	
21	第9図	L・M～6～7	台形	4.5×3.2	250.46～250.83	
22	第9図	K～5～6	不整精円形	5.0×3.5	252.59～252.61	
23	第9図 図版6	H～J～6～7	不整台形	11.8×4.4	255.67～255.33	
24	第9図	H～J～5～6	台形	10.5×3.8	253.94～254.51	
25	第9図	H・I～4～5	台形	5.4×2.3	253.11～253.35	
26	第9図 図版8	E～G～6～7	台形	12.0×5.1	254.32～255.19	
27	第9図	F・G～5～6	台形	5.2×3.8	253.35～253.96	
28	第9図	E～G～4～5	不整精円形	7.6×4.0	251.93～252.52	
29	第9図 図版8	D～F～5～6	台形	9.6×5.2	252.76～253.37	
30	第9図	C・D～6～8	不整台形	4.6×4.6	252.86～253.22	
31	第9図	D・E～7～9	不整台形	9.8×6.9	254.14～254.77	3号壇場状造構と重複する
32	第9図	F・G～7～9	不整台形	4.8×2.2	255.99～256.44	1・2号壇場状造構と重複する



第9図 西曲輪群



第10図 西曲輪群土層断面図



第11図 西曲輪群断面図

3. 壁壇状遺構

壁壇状遺構は平面形が円形や梢円形を呈し、そのほとんどが西曲輪群の南斜面および東曲輪群の南西斜面から検出されている。とりわけ19~29列にかけて東曲輪群に並行するように配置されているのが特徴である。しかし、西曲輪群の壁壇状遺構は曲輪の長軸に沿って築かれた1群と、曲輪の平坦面や斜面に構築されたものもある。

遺構の規模は長軸が1.5~4mを超えるものもあるが、2~3m規模の遺構が多いようである。急斜面に構築されているため山側の上場と遺構底面の比高差が著しく、1m以上の差をもつものが16基を数え、12・13号壁壇状遺構では1.8mに達するものもある。

遺構の底面は井の底のように緩い球状を呈し、中心を谷間にもつものが多く、規模の大きい遺構は平坦な底面となる。3・10・11・15・20・23号では平面においてピットが検出されたが本遺構の性格を解明するには至っていない。

第3表 壁壇状遺構一覧表(1)

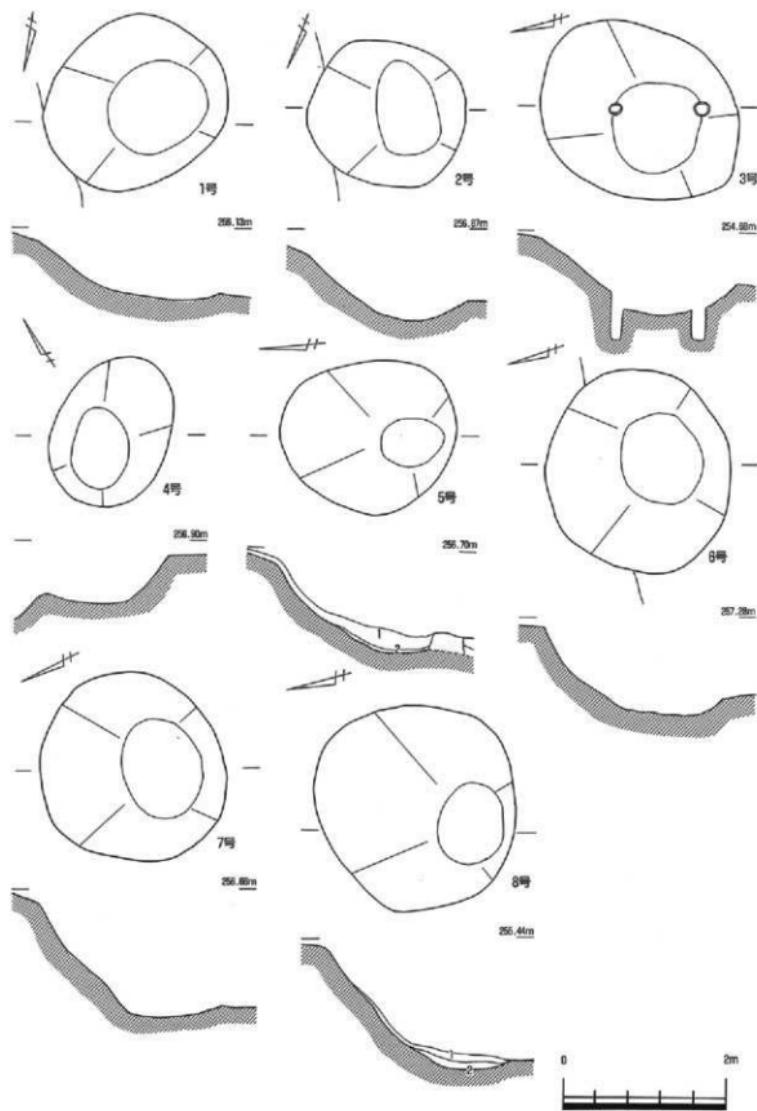
(単位:m)

No	挿図・図版番号	位置	形態	規模 長軸×短軸	比高差 (山側の上場と 底面の差)	覆土・重複
1	第12図 図版9	E・F-8	円形	2.29×2.23	0.69	31・32号曲輪と重複するが新旧 関係は不明
2	第12図 図版9	F-8	円形	1.95×1.78	0.66	16・32号曲輪と重複するが本遺 構が新しい
3	第12図 図版9	D・E-8・9	梢円形	2.70×2.13	0.92	31号曲輪と重複するが本遺構が 新しい
4	第12図 図版9	F・G-7	梢円形	1.93×1.41	0.59	16号曲輪と重複するが本遺構が 新しい
5	第12図 図版9	F・G-9	梢円形	2.16×1.90	1.09	1腐植土 2暗褐色土 16・ 31・32号曲輪と重複するが新旧 関係は不明
6	第12図 図版9	G・H-9	梢円形	2.56×2.27	1.09	15・16号曲輪と重複するが本遺 構が新しい
7	第12図 図版9	H-10・11	円形	2.31×2.28	1.38	
8	第12図 図版10	H-11・12	円形	2.58×2.56	1.49	1腐植土 2灰褐色砂質土
9	第13図 図版10	H・I-16	梢円形	3.73×3.07	1.60	1腐植土 2暗茶褐色土
10	第13図	K・L-15・16	梢円形	4.27×3.73	0.33	
11	第13図 図版10	G・H-19・29	梢円形	3.45×3.06	1.50	1腐植土 2暗褐色土 3暗茶 褐色土
12	第13図 図版10	F・G-20	梢円形	2.75×2.20	1.82	1腐植土 2暗褐色土 3褐色 土 4茶褐色土 5褐色土

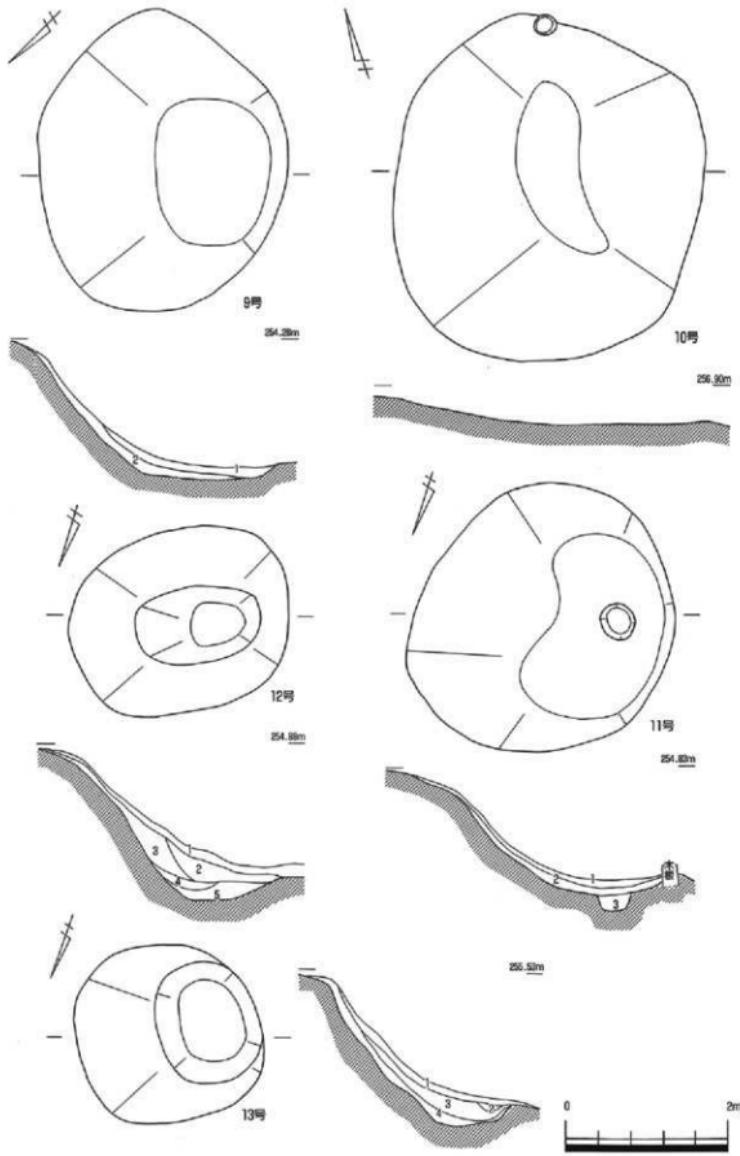
第3表 葩壠状造構一覧表(2)

(単位:m)

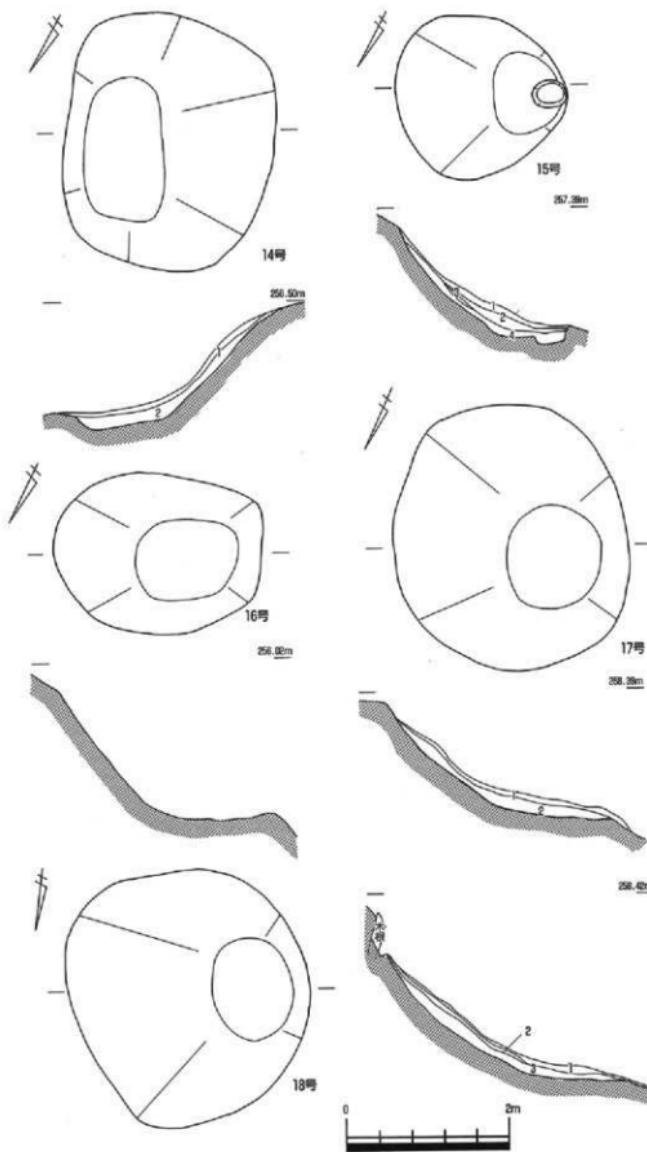
No	擇図・ 図版番号	位 置	形 態	規 模 長軸×短軸	比 高 差 (山側の上場と 底面の差)	覆土・重複
13	第13図 図版10	F・G-21	円形	2.24×2.19	1.81	1腐植土 2暗茶褐色土 3暗褐色土 4茶褐色土
14	第14図 図版10	G-22・23	椭円形	3.13×2.58	1.58	1腐植土 2灰褐色土
15	第14図 図版10	G-23・24	円形	2.10×2.03	1.34	1腐植土 2灰褐色土 3茶褐色土 4暗褐色土
16	第14図 図版10	G-24	椭円形	2.55×1.97	1.64	
17	第14図 図版10	G・H-24・25	椭円形	3.28×2.87	1.46	1腐植土 2茶褐色土
18	第14図 図版11	G-25・26	椭円形	3.14×2.88	1.56	1腐植土 2暗褐色土 3茶褐色土
19	第15図 図版11	G-27	円形	1.58×1.56	0.74	1腐植土 2暗褐色土 3茶褐色土 2号曲輪と重複するが本造構が新しい
20	第15図 図版11	G-27	不整円形	2.28×1.59	1.08	1腐植土 2暗褐色土 3暗茶褐色土 4茶褐色土 1号曲輪と重複するが新旧関係は不明
21	第15図 図版11	F・G-27	椭円形	1.69×1.58	1.05	1腐植土 2暗褐色土 3褐色土
22	第15図 図版11	G・H-27・28	円形	1.50×1.31	0.62	1腐植土 2暗茶褐色土 3褐色土 1号曲輪と重複するが本造構が新しい
23	第15図 図版11	G・H-28	円形	1.54×1.35	1.13	1腐植土 2暗茶褐色土 3褐色土 1号曲輪と重複するが新旧関係は不明



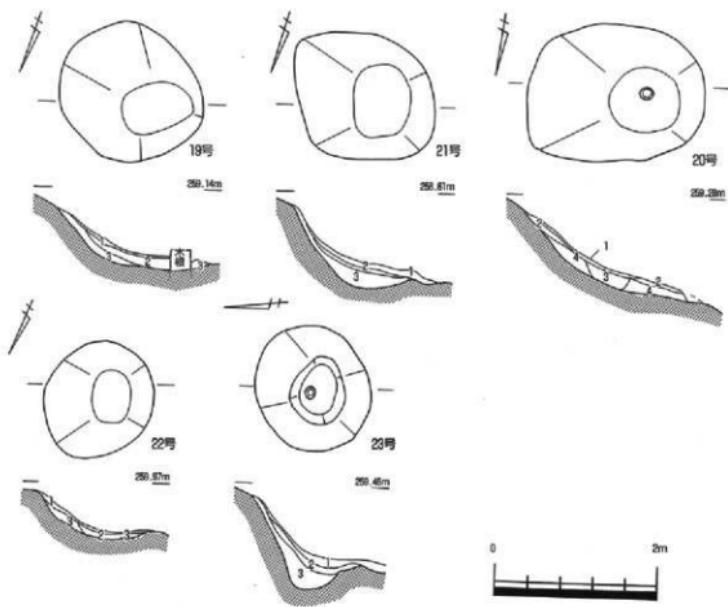
第12図 虹壠状遺構 (1)



第13図 灰岩状遺構 (2)



第14図 蟹塹状遺構 (3)



第15図 墓壇状遺構(4)

5. 包含層出土遺物

(1) 土 器

このたびの調査で出土した土器は10点で、縄文土器が4点と赤焼土器が6点で、そのうち文様や器形が明らかな土器5点を図示し第1群から第4群に大別した。

第1群土器 (第16図、図版12) 表裏縄文土器を本群とする。1は体部破片で表面は横位に、裏は斜位にR Lの縄文が施される。胎土に纖維を含む土器で縄文早期後半に比定される土器である。

第2群土器 (第16図、図版12) 羽状縄文土器を本群とする。2は筋の粗い羽状縄文が施され、R L/L Rの斜縄文がそれぞれ縦位に施文され羽状を形成する。胎土中に纖維を多量に含み、前期前葉に比定される土器である。

第3群土器 (第16図、図版12) 縄文晩期の粗製土器を本群とする。3は頸部がすさまり口縁が外反りぎみに開き、頸部から口縁にかけて無文体を形成し胸部には斜縄文が施文される土器で、縄文晩期の粗製土器であろうか。

第4群土器 (第16図、図版12) 赤焼土器を本群とする。4・5は高台壺の底部である。4は低径が4.8cmで高台部分はていねいな調整が施される。5は低径が5.2cmを測り、やや外反りした高台が付く。9~10世紀に比定されよう。

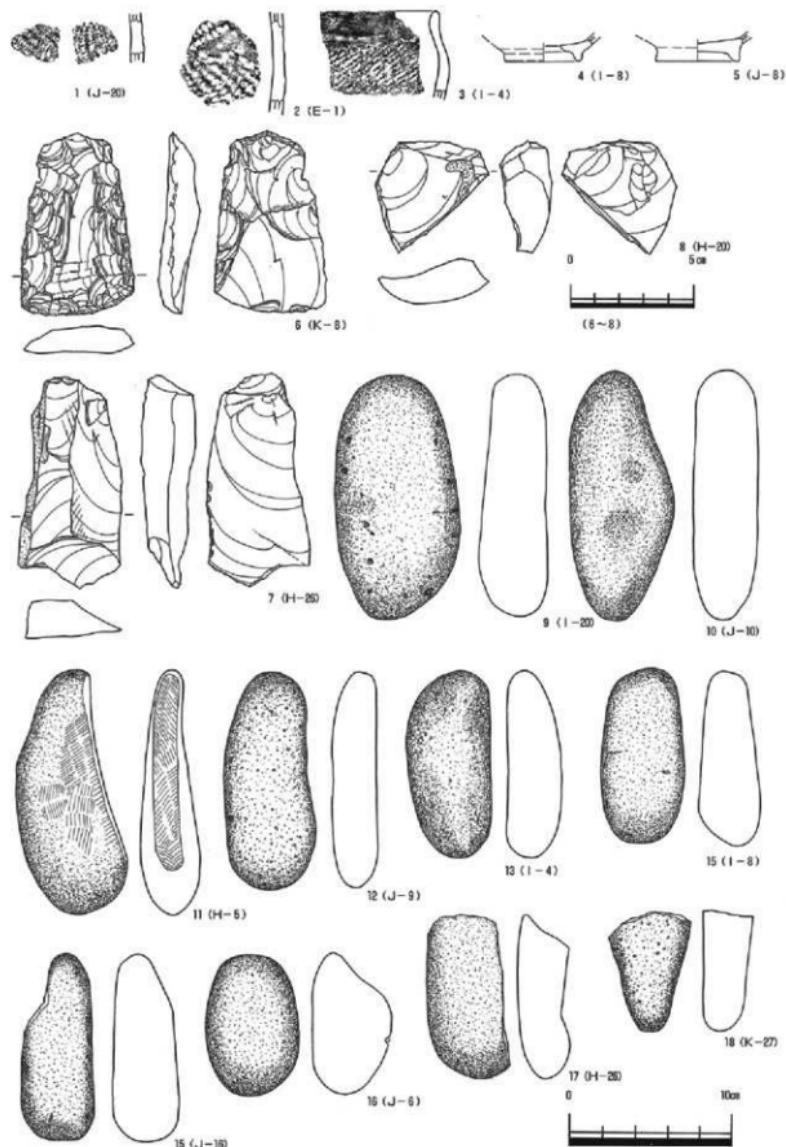
(2) 石 器

石器は整理箱で2箱分が出土し、ほとんどが磨石と碎片である。ここでは器種別に13点を図示した。

鎋状石器 (第16図、図版13) 6は横長の剥片を素材とした石器で、主要剥離面を大きく残し背面には器中央に向けて左右両刃から細かい剥離を加え石器の形状を整えている。石質は頁岩で、長さ7.5cmを測る。

剥 片 (第16図、図版13) 7は厚みのある縦長の剥片で、基部には打面作出の剥離が施されている。背面には平行した2条の剥離痕を大きく残し上下両端から剥片剥離が行われていることから、旧石器時代の剥片の可能性もある。石質は頁岩で、長さは8.6cmを測る。8も厚みのある剥片で器の中央から先端部を大きく欠損している。基部には打面作出の剥離が施され、7同様旧石器時代の剥片の可能性もある。石質は頁岩で、現存する長さは最長部で4.6cmを測る。

磨 石 (第16図、図版13) 9は楕円形を呈し両面に磨面を形成するが、図示した面が使用頻度の高さを示すように扁平を呈する。石質は凝灰岩で、長さは15.1cmを測る。10は片面に磨痕が見られるほか、円形の浅い窪み状の敲打痕もある。石材は石英安山岩で長さは15.3cmを測る。11は端部から側刃にかけて縁辺部が抉られたような磨り面を形成し線状痕が観察される。平坦な両面にも同様の痕跡が見られる。石質は石英安山岩で、長さ15.2cmを測る。12は楕円形を呈する扁平な礫の片面に磨痕が見られる。石質は石英安山岩で長さは8.3cmを測る。13は扁平礫の片面に磨痕が形成され、線状痕が見られる。石質は石英安山岩で、長さは11.5cmを測る。14はやや厚みのある礫の片面に磨痕をもつ石器で、石質は細粒花崗岩である。長さは10.7cmを測る。15は縁辺部を一部欠損するが厚みのある礫の片面に磨痕が見られる。石質は石英安山岩で、長さは11.5cmを測る。16は断面が球形を呈する礫面に磨痕が見られる。石質は凝灰岩で、長さは9.8cmを測る。17は端部と側刃を欠損するが扁平礫の片面に磨痕が見られる。石質は石英安山岩で、現存長は10.1cmを測る。18は扁平礫の端部で片面に磨痕が見られる。石質は石英安山岩で、現存長は7.4cmを測る。



第16図 包含層出土遺物

第V章 まとめ

(1) 遺構

このたびの愛宕山館遺跡の調査で、104×48mの範囲から掘立柱建物跡2棟、曲輪32基、塀壕状遺構23基が検出された。遺構は北西—南東方向に伸びる尾根筋に沿って構築され、西端と南東端に集中して築かれている。東曲輪群では北斜面を曲輪、南斜面には塀壕状遺構を配し、1号曲輪を囲むように遺構が築かれている。また、最上川や長井・米沢両盆地を一望することができる西曲輪群には15号曲輪を中心に単独または連結した状態で4条の曲輪が同心円状に配置されており、西側地域に対する意識の強さをうかがい知ることができる。

掘立柱建物跡は15号曲輪で1棟検出されたが、柱の配置から建物跡の立替が想定されるが新旧関係は不明である。2棟の掘立柱建物跡とも掘り方は未検出である。曲輪は北および西斜面から多く検出され、長さ2.5~30.2m、幅2.2~8.0mを測り、斜面を削った土を盛土とし平坦面を形成する構築方である。塀壕状遺構は南斜面から多く検出され長径4.27~1.50mを測り、尾根の西端と南東端に付近に築かれたものは規模が小さく、鞍部の緩斜面に築かれた遺構は規模が大きい。調査前の地形において31・32号曲輪に塀壕状遺構の凹地が見られたことから、両者の新旧関係は曲輪が古く塀壕状遺構が新しいと考えられる。

遺跡の性格を考えると、掘立柱建物跡をもつ曲輪の規模が小さく、建物跡が単発的で規模も小さいことから、中核となる施設は愛宕山山頂と推測され、本調査区は砦や見張台の役割を担った施設跡と考えられよう。また、調査区西側は現在、山砂採取跡地となり平坦地となっているが、以前は尾根から伸びる丘陵が続いている存在したという。館跡に係わる遺構の存在が予想されるところである。

(2) 遺物

出土遺物は縄文時代の土器や石器が最も数が多く、次いで平安時代の赤焼土器が数点出土しているが、いずれも包含層から出土したもので遺構の年代を特定するには至っていない。しかし、山間地の平坦地から縄文時代の土器や石器が出土した意義は大きい。以前、調査区域の南側の丘陵において縄文時代の遺物が採集されたとの情報もあり、当該山地の比較的の平坦地においても先史時代の集落の存在が予想され、興味深いところである。また、出土石器において縦長剥片は単発的な出土であったが、打面調整の剥離が施され背面に2条の剥離痕をとどめ上下両端からの剥片剥離が認められ、東北日本海側から北陸地方にかけて広く分布する東山型ナイフ形石器の石刃に近似する。今後の類似資料の増加によっては周辺の山地から旧石器時代の遺跡が発見される可能性もある。

愛宕山館の年代を特定するにあたり問題になるのは赤焼土器の存在である。本遺跡は遺構の形態や特徴から戦国期の館跡としてとらえてきたが、当該期に属する遺物の出土は見られない。赤焼土器は胎土や底径の大きさやつくりの特徴から9~10世紀の所産と考えられ、館跡の年代とはかけ離れている。館跡の年代を遡らせるよりも平安時代の生活面を壊して戦国期に館跡が築かれたものと解釈するのが妥当であろう。

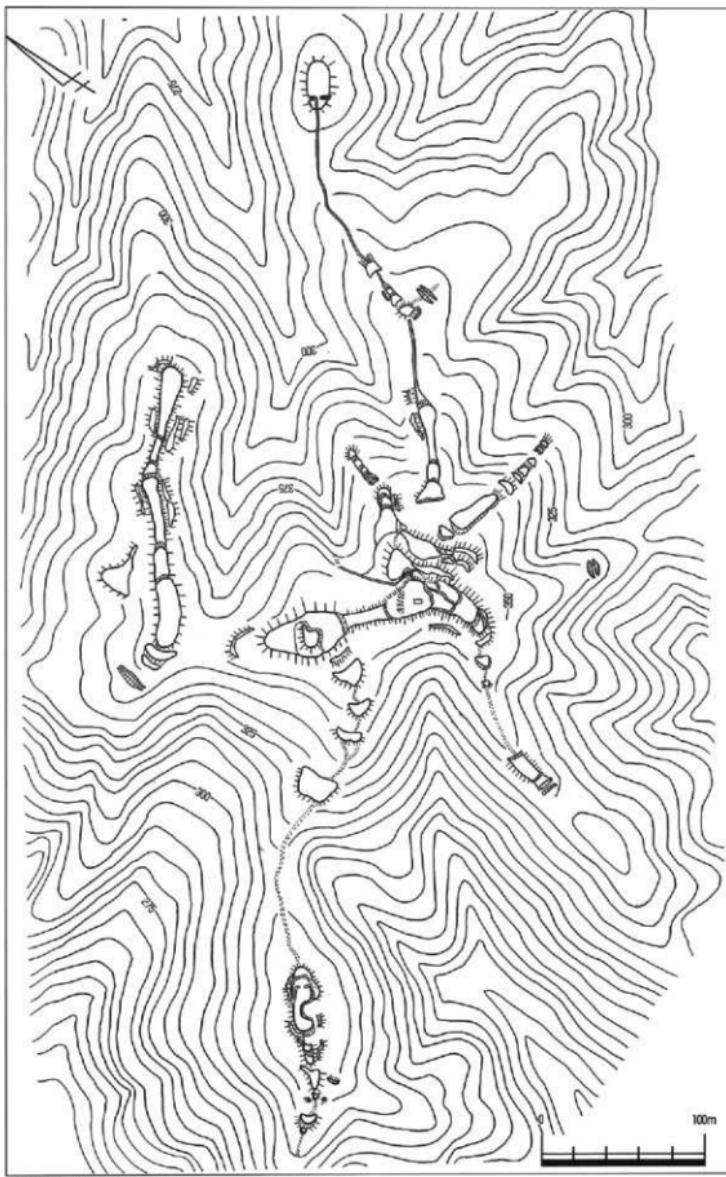
以上のことから、開発予定地である愛宕山館跡には縄文時代、平安時代の遺物が検出されたが、館跡の年代を特定するには至っていないものの、遺構の形態や配置から愛宕山館の年代は大枠で戦国期の遺跡として捉えることができよう。

(3) 周辺の山城について

前項でも触れたように本調査区で検出された遺構は愛宕山館に付随する施設のひとつで、中核となるのは愛宕山山頂の遺構群と推測される。愛宕山館は標高361mの山頂から四方に伸びる尾根筋に曲輪や堀切が見られ、ちょうどヒトデ型に遺構が配置されているところに特徴がある（第17図）。築城者や時期は明らかではないが、遺跡の規模は東西700m、南北310mと広範間にわたって遺構が散在している。同じような形態を呈する山城に八幡館がある。愛宕山館から北に約3kmの地点にあり、最上川右岸の通称戸田山の山頂に曲輪や堀切が構築されている。遺跡の範囲は200m四方と愛宕山館よりも小さいが館跡としては大規模な遺跡である。愛宕山館と同様に築城者や時期は明らかではないが、眼下を最上川が北流し山頂から伸びる尾根筋に遺構が築かれ、山頂からの眺望も良好で館跡の立地には最適の地形である。

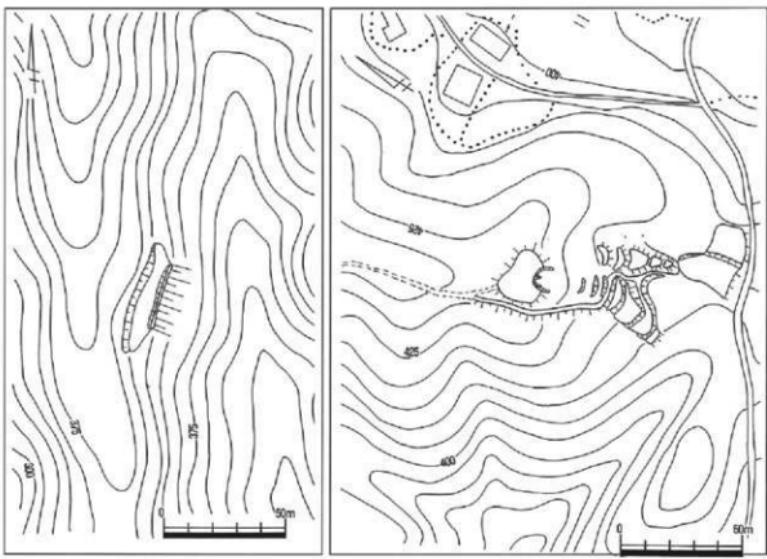
伊佐沢地区には愛宕山館のほかに7箇所の山城が知られている（第2図）。大石地区には街道をはさんで中屋敷館と廻館が隣接する。中屋敷館は街道沿いに段差をもつテラス状の曲輪が構築され、山の頂にかけて伸びる帯曲輪状の通路に沿って遺構が築かれている（第18図）。廻館は中屋敷館の南側に位置し、東西170m、南北50mの規模をもつ。東西方向に伸びる尾根筋にテラス状の曲輪が3段構築され、標高の最も高い山頂には「L」字形の帯曲輪に囲まれた曲輪を配する。両者とも築城者・築城年代は不明である。馬鹿曲輪は南に伸びる尾根の東斜面に東西12m南北45mにわたりテラス状の曲輪が築かれている（第18図）。詳細は明らかではないが東側に土壘状の土手をもち、谷側からの視界を遮る構造になっている。若尻砦は上伊佐沢地区に位置し、西から東に伸びる尾根筋に曲輪や堀切が築かれている（第19図）。曲輪は10~20mと小規模であるが、尾根を断ち切った堀切は比高差が4mにも達し曲輪と山道を遮断するのに充分な構造をもつ。現在東斜面は山砂採取で削平を受けているが、遺構の存在が予想される。築城者や年代は不明である。岩館は逆川右岸の「T」字状に張り出した丘陵の山頂部に築かれている（第19図）。「」字状に構築された曲輪を中心とし北東には小規模な曲輪が階段状に見られ、南尾根は比較的平坦な曲輪が続く。築城者や年代は不明である。御林館は芦沢地区に位置し、比較的平坦な尾根の斜面に曲輪の痕跡がかすかに見られる（第20図）。しかし、北東斜面には3~4重の帯曲輪が回廊のように巡り比高差3mの堀切が構築され、南東部の沢筋を意識した遺構配置と推測される。築城者や年代は不明である。裏山館は南陽市に隣接する尾根の中腹に遺構が築かれている（第20図）。2条の帯曲輪で囲まれたテラス状の平場は三段構築の塚状を呈し東南部に浅い堀切が見られる。神社の北東側に帯曲輪が築かれ、テラスまで山道が通じてることから神社の敷地も遺構の可能性がある。築城者や年代は不明である。

以上、周辺の山城について概略を記したが、曲輪の規模からいくつかのタイプに分類される。ひとつは小規模な曲輪を尾根沿いに連結し段々畠の形態を呈するもので、中屋敷館・岩館・若尻砦・御林館がこれにあたる。反対に50mを超える曲輪を有し館の規模も200mに達するもので、愛宕山館・廻館がある。築城時期が明らかでないため詳細な比較は困難であるが、遺跡の立地から愛宕山館は盆地の地形を呈する伊佐沢をはじめ周辺地域を見渡せる位置にあり、廻館は旧道における幹筋の要所としてとらえることが可能である。遺跡規模の相違を地理的要因として検討することも課題のひとつである。



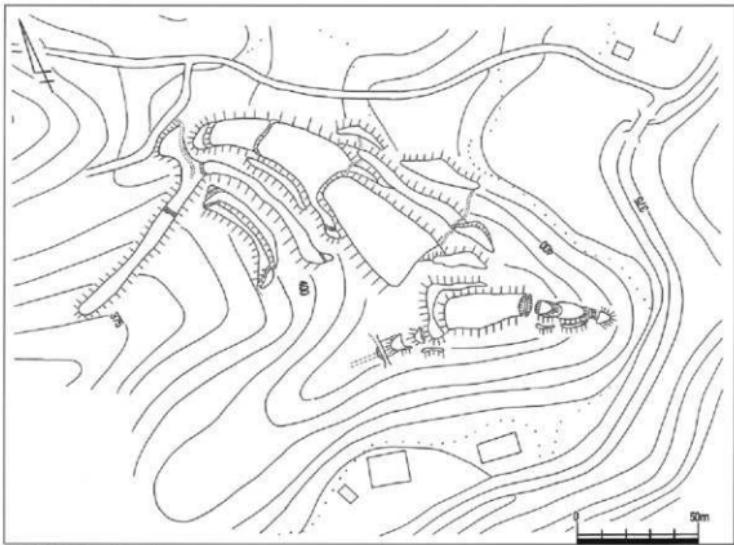
(d) 教育委員会(1995年冬一部改変)

第17図 愛宕山館遺跡略測図



馬籠曲輪

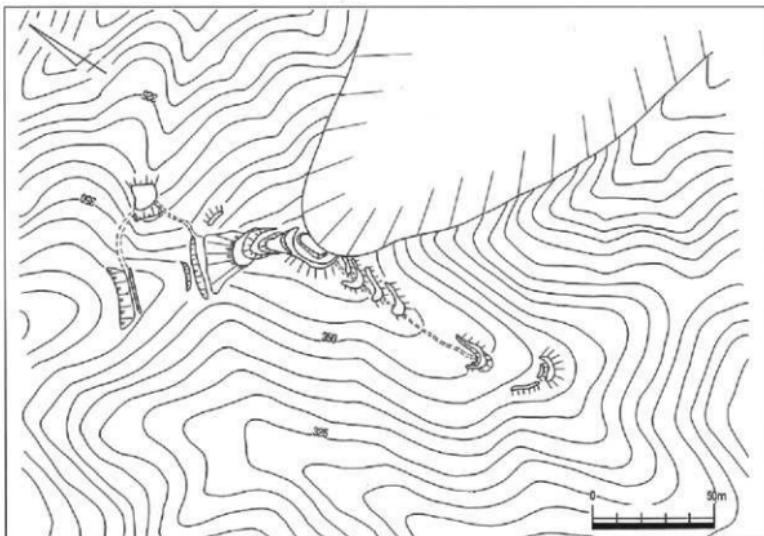
中屋敷館



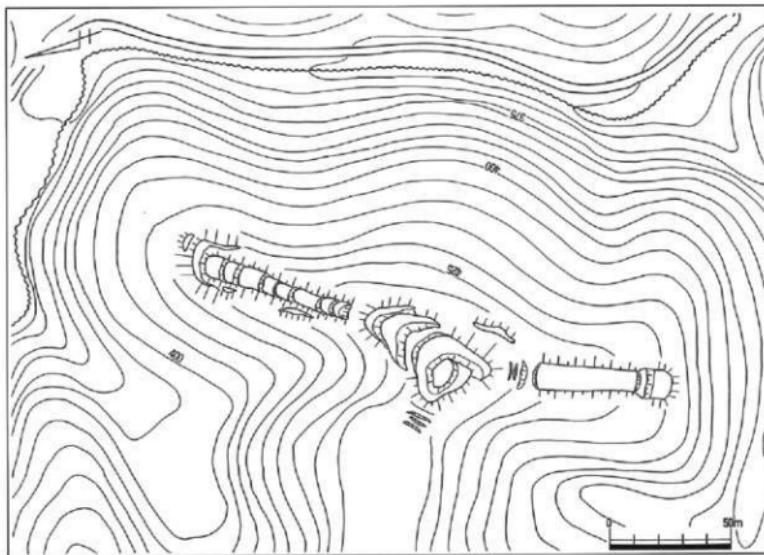
(山形県教育委員会1995年を一部改変)

廻館

第18図 伊佐沢の山城略測図（1）



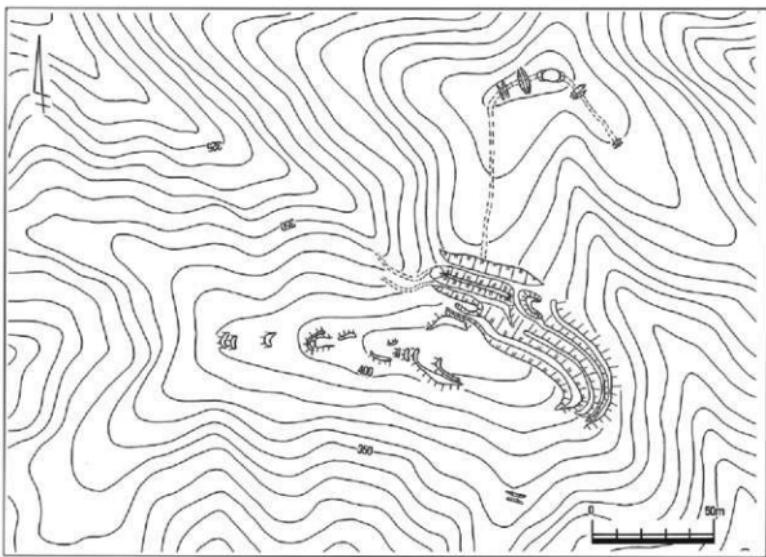
若尻砦



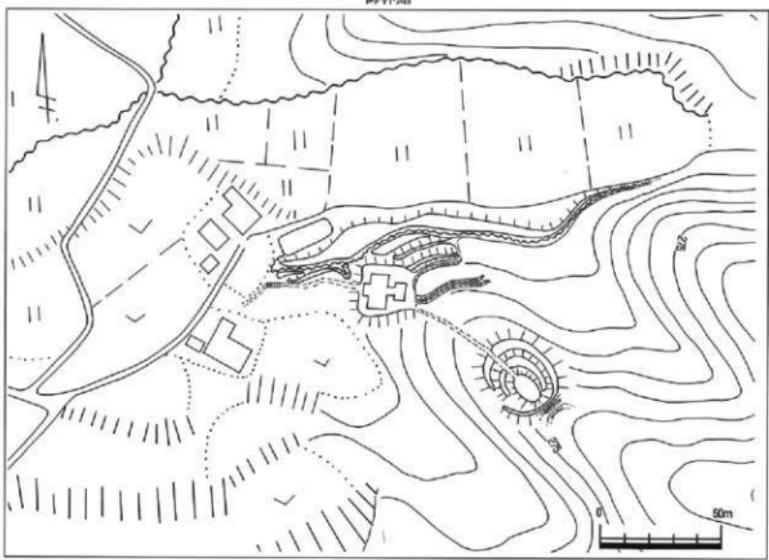
岩館

(山形県教育委員会1995年を一部改変)

第19図 伊佐沢の山城略測図（2）



御林館



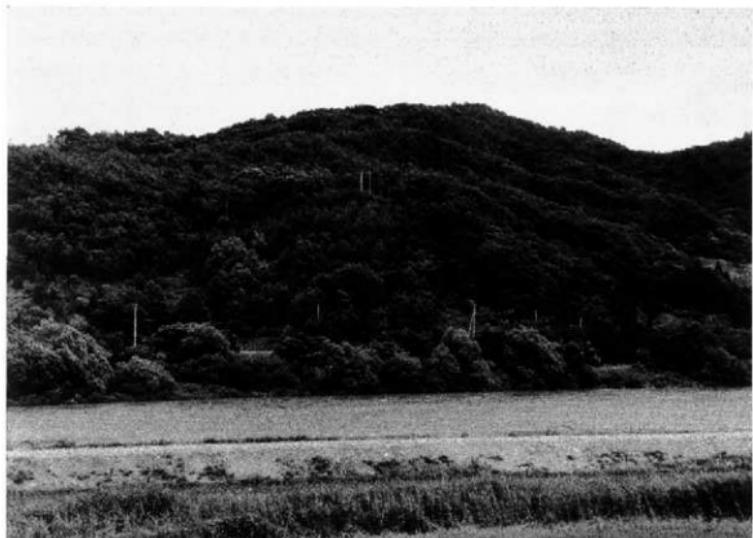
裏山館

(山形県教育委員会1995年を一部改変)

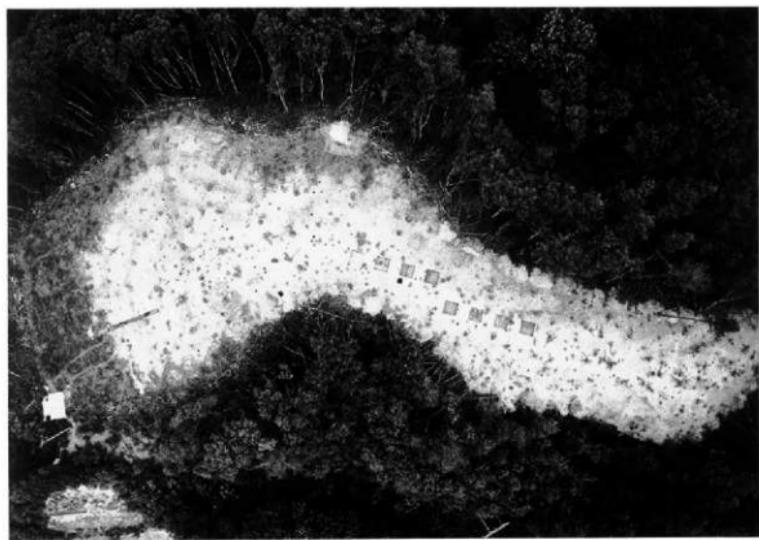
第20図 伊佐沢の山城略測図（3）

図 版

図版 1



道路遠景（西から）



調査区全景（上空から）

図版 2



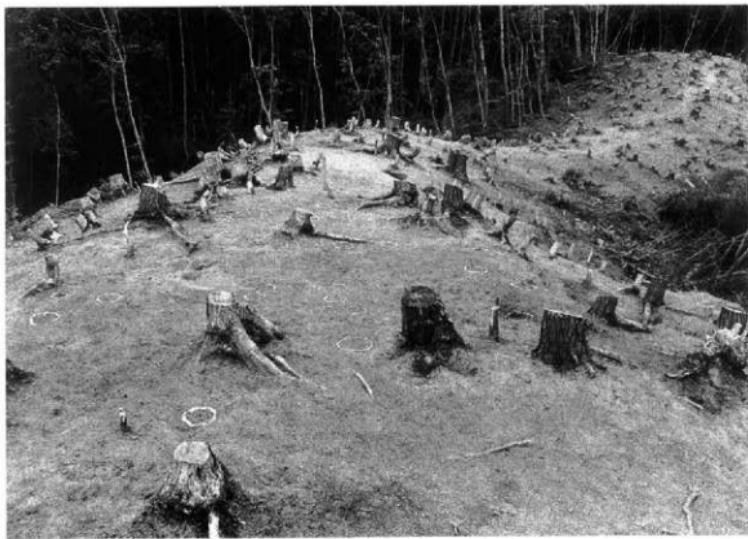
遺跡近景（南東から）



西曲輪群（西上空から）

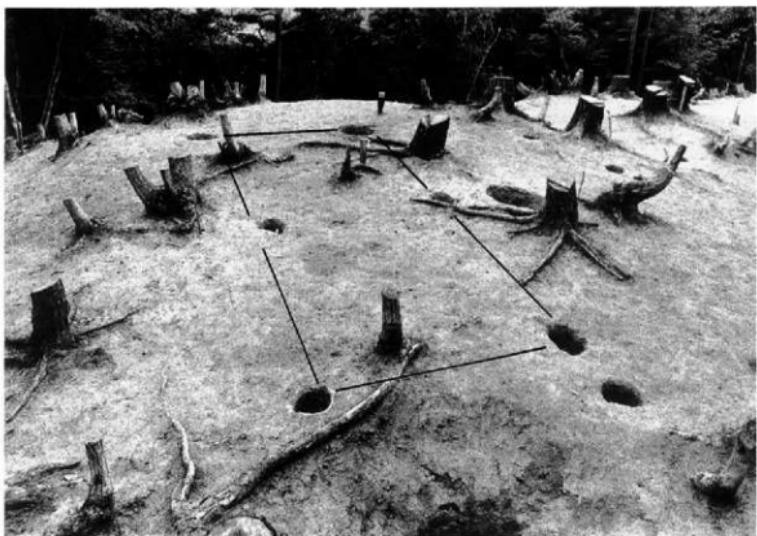


東曲輪群（上空から）

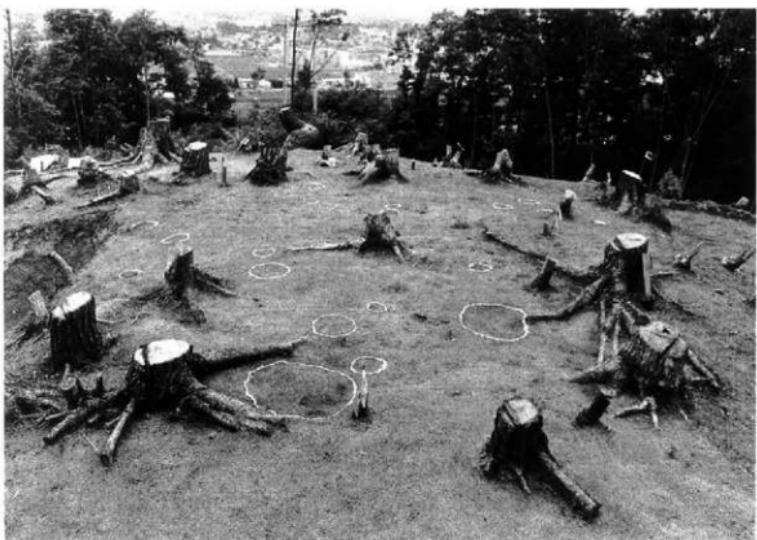


15号曲輪（東から）

図版 4



1号掘立柱建物跡（北東から）



15号曲輪（南東から）



16・26号曲輪（北から）



15・17号曲輪（南東から）

図 版 6



11号曲輪（北から）



14号曲輪（東から）



16号曲輪（西から）



19号曲輪（西から）



19・20号曲輪土壙断面
(北西から)



19号曲輪土壙断面
(西から)

図版 8



26・29号曲輪（北から）



26号曲輪土層断面
(北から)



29号曲輪土層断面
(北から)



1号 蝋塗状遺構（南東から）



2号 蝋塗状遺構（西から）



3号 蝋塗状遺構（南西から）



4号 蝋塗状遺構（東から）



5号 蝋塗状遺構（西から）



5号 蝋塗状遺構（西から）



6号 蝋塗状遺構（南西から）



7号 蝋塗状遺構（南東から）

図版 10



8号 蝋塗状遺構（西から）



9号 蝋塗状遺構（西から）



11号 蝋塗状遺構（西から）



12号 蝋塗状遺構（北西から）



14号 蝋塗状遺構（東から）



15号 蝋塗状遺構（西から）



16号 蝋塗状遺構（西から）



17号 蝋塗状遺構（西から）



18号 計量状遺構（西から）



19号 計量状遺構（西から）



20号 計量状遺構（北西から）



20号 計量状遺構（北西から）



21号 計量状遺構（北から）



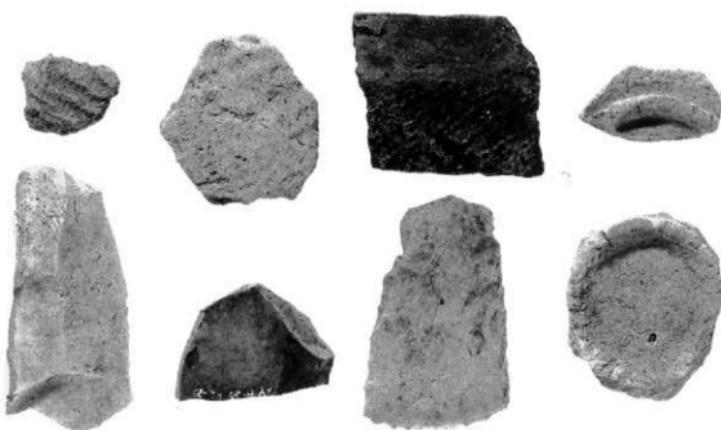
22号 計量状遺構（西から）



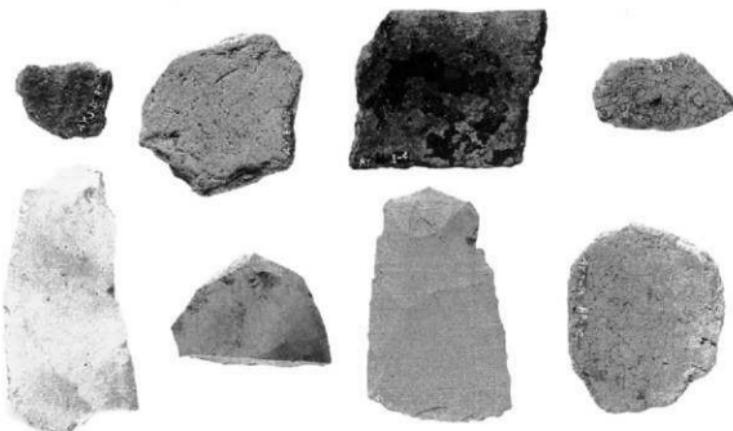
23号 計量状遺構（南から）



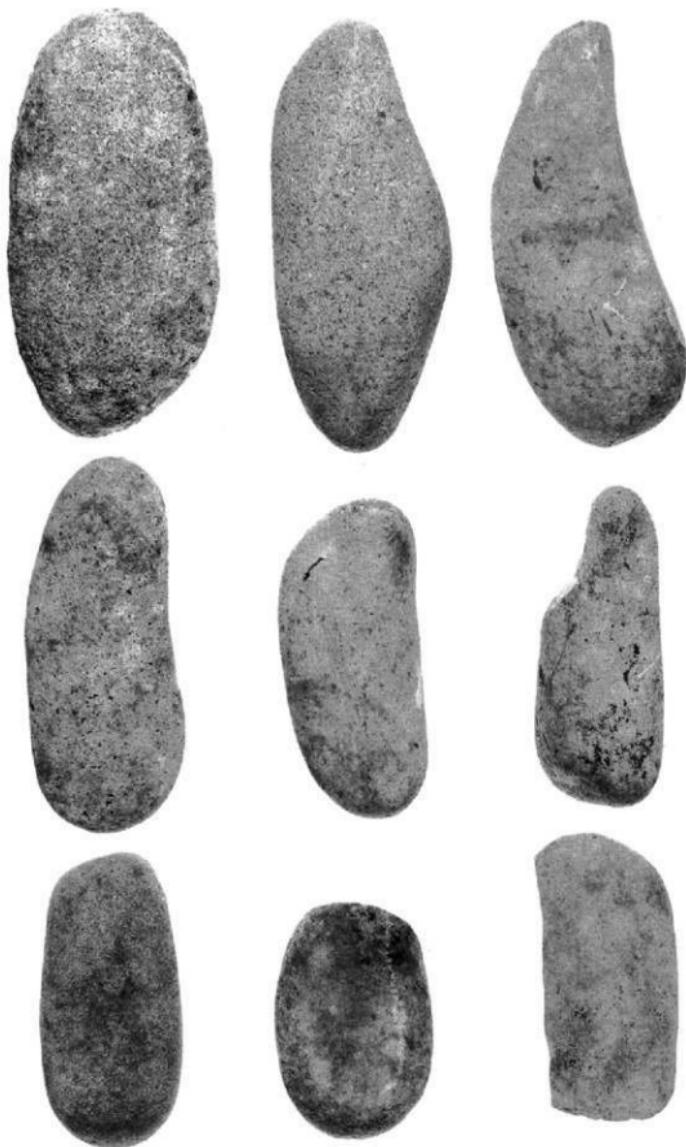
炭窯跡（東から）



包含層出土遺物（1）表



包含層出土遺物（1）裏



包含層出土遺物（2）

報告書抄録

ふりがな	あたごやまだいせきはつくつちょうさほうこくしょ							
書名	愛宕山館遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	山形県長井市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第23集							
編著者	岩崎義信							
編集機関	長井市教育委員会							
所在地	〒993-8601 山形県長井市ままの上5番1号 TEL0238-84-2111							
発行年月日	西暦2003年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査要因
		市町村	遺跡番号					
愛宕山	山形県長井市 中伊佐沢字南 掃出シ2437	6209	167	38度 5分 17秒	140度 3分 10秒	2001. 05.21～ 07.25	1,800m ²	山砂採取
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
愛宕山	館跡	縄文時代、 平安時代、 戦国期	掘立柱建物跡、 曲輪 他		縄文土器、範状 石器、磨石、 赤焼土器			

長井市埋蔵文化財調査報告書 第23集
愛宕山館遺跡発掘調査報告書

平成15年3月31日発行

発行 山形県長井市ままの上5番1号
長井市教育委員会
印刷 ダイヤ印刷所